
薄明のとき

村上 悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薄明のとき

【Nコード】

N3480S

【作者名】

村上 悟

【あらすじ】

子供を失った画家は、絵を描く気力さえ無くしてしまった。しかし、彼は子供を絵の中に残すことを選ぶ。妻との暮らしの中で、彼はその方法を見つけていく。

静かに立ち上っていく煙を眺めて、恭二は煙草に火をつけた。一ミリグラムの軽さでは、彼の肺を満たすことはできない。悲しみが大きすぎて、吸い込んでも咳き込むだけで。

夕暮れにくつきりと浮かぶ二つの灰色に、寂しい一体感があつた。この瞬間だけでも我が子と一緒になれただけ、救いがあるのかもしれない。彼はその二本の線にある着想を得た。それを描きたいと思う。こんな時でも光景を美しいと思うのは罪だ。誰に対してでなく自分にとって。

薄い紫煙が息子の命の儚さと同じに見える。魂が見えればこんな色をしているのかもしれないな、感動と寂寥と、二つの感情に囚われた恭二は言い訳のようにそう口ずさんだ。

「何も言わず出ていたりして、皆さんが心配してますよ」

洋子が後ろから声をかける。どうしてもこの景色を見たくて、謝りながらも視線は動かない。つられるようにして妻が彼の視線を追った。どれくらい同じ時間を過ごしただろう。ふと、洋子が「ひどい人」と言った。

「私が？ どうして……」言いかけて気が付いた。彼女も自分と同じ感慨を持ったのだ。

「こんな時でも絵のことばかり考えているんですね」

いつもと違った言葉遣いに戸惑った。もつと軽快に詰ってくれた方が深く詮索しないで済む。全身を黒で埋めた妻はあらゆる言葉を拒絶しそうな雰囲気を持っていた。接し方がそれを表している。絵のことばかり、確かにその通りだ。恭二の頭の中に構図と色彩が思い浮かぶ。夕暮れに浮かぶ二つの魂は母の愛に支えられていた。具體的にどうする。歪んだ太陽、小さな星が二つ、それを大きな手が包んでいる。画面が明るすぎる、と彼は咎められたにも関わらず続きを想像する。しかし、今日明日にそれを描こうとは思わない。そ

れだけの氣力が、今はない。

「すまない」

肩に置かれた手に氣付いて、恭二はもう一度、はっきりと謝る。

「今日ぐらい、絵のことは忘れて」

ほんの少し落ち着いたようだ。洋子にだって分かつている。日常が変化しても、恭二の絵が売れなければ生活はままならない。ただでさえ共働きでないと暮らしていけない有様だった。燃え尽きた煙草を捨て、足で揉み消す。その吸い殻を彼女が摘んだ。微笑みが漏れる。こんな時でもお前は……そう言いかけてお互い様だと思つた。
「なあ洋子」

携帯灰皿に吸い殻を仕舞う妻に話しかける。

「このことは誰のせいでもない。氣にするなよ。私たちだってまだ若いんだ。子供ならまた作ればいい」

恭二の無神経ぶりに苛立つたが、洋子はそれが彼の精一杯の優しさだと知っている。ようするに不器用で、それが常に悪い方向に進ませている。何も言わず、表情を変えないままうなずいた。照れたのか彼がまた煙草に火をつける。もう煙は一つしか見えなかった。

美大の頃からの付き合いで、ようやく結婚したのがもう五年も後だった。なにぶん恭二は食い扶持が稼げず、かといってフリーターや就職に食指を動かすにはプライドが高すぎた。周囲に言わせれば夢を見すぎていたのだ。その夢がようやく、何とか形になってからの結婚だった。彼に望みがあつたように洋子にも理想があつた。早々に自分の才能と折り合いをつけていた彼女は恭二との生活だけにその夢を当てはめた。部屋のインテリアはどうしよう、カーテンの色は、毎年小さな旅行に行こう、子供は何人作ろう。大きな理想が実現しないのと同じくらい、小さな夢も実現しにくい。むしろそれは現実に近いだけ細かいことが氣になって、なかなか満足を得られなかった。まず一番の弊害は家計だ。決して裕福とは言えない中で、

洋子の家に対する憧れは砕かれていった。

「行つてきます」

いつも家にいる恭二と違って、洋子は朝早くから働きに出かける。これじゃ逆さまね、たまに愚痴をこぼすようにそう言った。夕飯を作るのも、洗濯も掃除も家事の一切は恭二の仕事となった。彼自身は押し付けられた家庭の些事に文句を言わない。気分転換は何よりの宝だと言つて進んでしようとする。

「ただいま」

疲れた体であり上手とは言えない料理を口にする。恭二はいつだつて絵のことしか話題にしない。今日はどの辺りまで進んだかを話し、実物を見せては批評を求めた。もちろん彼の性格から素直にそれを受け入れることはなかった。

夜の営みも欠かしたことがない。恵まれたとは言えない生活の中で、洋子の残された希望は子供だけだった。何年も授からない子宝を不安に思つて産婦人科に検診に行ったこともある。何も問題ありませんよ、との医師の言葉をどれほど疑ったことか。

恭二はあまり興味を見せなかった。子供が欲しいね、と彼女が言うのと、そうだな、とうなずくだけでそれ以上話題は発展しそうになり。一度、子供が欲しくないの？ と迫ったことがある。彼は困つたように笑つてこつ言つた。

「私はお前との生活に満足しているからね」

実生活に対する感覚が鈍いんだな、とそのとき思った。ようするに彼は絵さえ描いていられれば満足だったのだ。洋子是不満に思いながらも、納得してしまふ面がある。疑問はあるのだ。このままで良いのだろうか。しかし、彼女は恭二を慕っていたし彼の絵が好きだった。多少の忙しさを除けば、積極的に不満だと言えることは何もなかった。絵のことばかりと言つても家に籠もっているわけではない。

休みになると恭二はしきりにスケッチに誘つた。

「この前、いい場所を見つけたんだ」

学校の裏にある小さな雑木林、そこにちょうど椅子のように平らになった岩があった。彼はそこに座るように勧める。

「目を閉じてごらん」

さ、と風が吹いて、耳をくすぐった。微かに鳥の声が混じり、さらに子供の歓声が混じる。静かなのに賑やかな場所だ。

「上を見てごらん」

そう言われて目を開けるとまっすぐに日差しが下りてきていた。太陽の光は恭二のもっとも好きな対象だ。柔らかな緑に白い影が射して……ともに抽象作品を好む二人にとって「良い写生場所」だった。

不思議なことに、家では絵のことしか話さない恭二が、絵を描いているときには日常の小さな話題に目を向ける。職場はどうだい、親切な人はいるかい、仕事は上手くいっているかい、辛いことはなかったかい、そう言って洋子に気を遣ってくれる。彼自身も自分のことを良く話してくれた。

「最近ようやく、料理というものが分かってきたような気がするよ」

「あなた下手なものね」

「失礼な。それでもレシピを見ながら作ってるんだけどな」

「だからいつだって四人前しかできないのよ。ちゃんと分量減らして作ってる？」

「いやあ、だってそうすると味が崩れちゃうんで」

「味見しないからよ」

「してるよ、なんども」

洋子が額に手を当てた。何か悪いことでも言ったかな、といった表情で恭二が顔を覗き込む。

「あのね、味見は三回までっていう格言を知らない？」

「だって三回味見しちゃったら……」

「だから要所要所でするの」

一般知識に乏しい彼が微笑ましくも思う。そう、悪いことばかりでもないのだ。理想を追い求めなければ、焦らなければ順調に事は

運んでいった。

ようやく、年齢が大台に差し掛かったとき、子供に恵まれた。普段はあんなことを言っていた恭二が洋子よりも喜んだことに彼女は驚いた。

なんだ、ただの照れ隠しだったのね。

意外な一面を見たようで、嬉しかった。

息子が生まれるまでの時間、恭二はより一層、絵に臨んだ。今までは嫌がっていた静物の仕事も引き受けていた。そんな時は決まって洋子の側で絵を描いた。

「子供が生まれるまで、私一人で稼がなくちゃな」

そのことが嬉しいような口振りだった。

未熟児と聞いた時、それでも保育器の中で元気に育ってくれるものだと思っていた。本当に小さな手足を動かしている赤ん坊を見て、恭二は何度も名前を考え直していた。

その息子が、やはり生き続けられなくて、一番落ち込んだのは恭二だと洋子は思っていた。

その彼から出てきた言葉が苛立ち以上に信じられなくもあったのだ。

「このことは誰のせいでもない。気にするなよ。私たちだってまだ若いんだ。子供ならまた作ればいい」

洋子に対する優しさの表れだと思っただけでも、釈然としないものがあった。無理をしているように思えたからだ。そしてそれ以上に名前をつけてあげられなかった子供が可哀想だと思った。

喪が明けて、恭二が初めてアトリエに入った。しばらくは仕事も休むつもりでいた洋子は、立ち直ってくれたのかと少し明るい気持ちで食事の用意をしていた。

その恭二がいつまで経ってもアトリエから出てこない。もう外は薄暗く、彼は昼食も取っていない。集中している彼を邪魔するのは

気が引けたが、そつとドアを押す。

「恭二さん、もうご飯ができてるんだけど」

息を呑んだ。電気もつけなくて彼は同じものを何枚も描いているのだ。

赤い、赤い画面。キャンバスに塗られたのはただの一色だった。血の色でもない。かといって炎の色でもなかった。形容のしがたい低い明度を持った、紅葉した山のような赤さだった。

洋子が入ってきたことにも気付かない。

筆は、均一にキャンバスを押した。ペインティングナイフで塗るよりも荒さが出て、望んだ表現になる。微妙に変化をかけた色が必要だったので、絵の具は缶に出してある。五百号に描くような用意だが、実際には十二号……六十×五十センチ程度にしか過ぎない。傍らには今日一日で塗り上げた十何枚ものキャンバスが寝かせてあった。一つ塗り終わる度に、しかし色合いが違うと思つて缶に絵の具を混ぜる。そうすると次第に色は暗くなり、ますます適切な色彩から離れていくのだ。

恭二は部屋自体が暗いことに気付いていなかった。見ているのは画面だけで、それが濃さを増していくのは自分が疲れているからだと思つていた。

「ダメだ」

そう言つて筆を放り投げる。その音に洋子が声を上げ、ようやく彼は現実に戻った。しかし、そこがどこなのか一瞬分からなかった。白い壁、白い天井、大きな窓、陽光をより強く取り込むために選ばれたアトリエが青く彩られている。見ると、恭二の体もしばらくしてそこにいることに気付いた妻の体も青く染め上げられていた。

日が落ちて、だがその明るさがまだ奪われていない時間、もしくは日が昇る直前の希望に満ちたほんの少しの明るさ……薄明と呼ばれるその瞬間に恭二は立ち会つていた。輪郭は溶け、全ては一つのものに変化している。彼と彼女の間に距離はなく、濃密な海が満たしていた。これが恭二の求めたものだった。

「恭二さん？」

洋子の声に、耳を傾けない。再びキャンバスに向かう。筆を取り、まっさらな画面を画架にかける。

「灯りを点けないと……」

「ダメだ、そのままだ」

彼の言葉は彼女が誰かを認識していないような冷たいものだった。動くこともできず、洋子はその場に立ち続けた。こぼれ落ちるのも構わず、無造作に青を練りだした恭二は急いで白を塗りつぶしていく。この時間が過ぎるのを惜しんでいるように。

空間と一つにしようと思っていた。この瞬間の雰囲気を感じこめようとしていた。

恭二はあの日、心に描いた光景をしたためようとしていた。二つ昇る煙を写生しようとしていた。明るすぎると感じていたのは、それが相応しくなかったからだ。彼はその絵を息子と妻に捧げようと思っていた。言葉で伝えられないものを、色と形で伝えようとしていた。世の中のあらゆる境界を剥ぎ取ってくれるこの瞬間を絵にすることができれば、少しでも息子に近づくことができると思っていた。青は濃く、一分の隙もなく塗られていく。

話しかけても応えない夫を、洋子は不安に思っていた。怖かったのかもしれない。灯りも点けず、ただ一心不乱に筆を動かす彼に狂気じみたものを見ていた。それでも、邪魔をしないようにと彼女は扉を潜った。

スケッチに誘うときでも子供を宿したときでもない夫の姿に洋子は理由を探す。もし息子を亡くしたことが彼にそうさせているのなら、解消させてあげるのが自分の仕事だと思ったのだ。

「おはよう、ご飯できてるわよ」

次の日、遅く起きてきた恭二にことさら明るく声をかける。聞いていないのかそのままアトリエに向かおうとする彼の前に、洋子は

立ちふさがった。

「どうしたの、昨日から」

「何でもないよ」

「だって食事もとらないで絵を描いてばかり。それじゃ体を壊すわ」
それでも「大丈夫だよ」と言って歩みを進めようとする。無理に手を掴んで食卓に座らせるが、夫は一言も口を利かずに用意してあった食事をすませ、部屋に籠もった。

「少し休憩しない？」

邪魔をしたいわけではないが、普段に増して語りかける。滅多に近寄らないアトリエに何度も出入りし、気を向かせようとした。

「いや必要ない」

「そんなこと言わないで」

むりやり隣に座る。話しかけるきっかけが欲しかった。サイドテーブルに置かれたコーヒーには手をつけず、目は画面を向いている。昨日とは違って今は一枚のキャンバスに専念しているようだ。

絵を描くときだけは日常的な会話をしてくれたことを思い出し、彼女は期待を寄せた。しかし彼は真っ青に塗られた画布を前に腕組みして考えている。

「構図が決まらないの？」

仕方なく、自分から話しかける。絵のことでもいい、構って欲しかった。彼の心が知りたかった。

「いや、そうじゃない」

その先を待っても、彼が口を開くことはなかった。

「じゃあ下塗りが気に入らないの？」

「いや、そうじゃない」

どうやら彼は洋子の言葉など耳に入っていないようだ。

「じゃあ何が……」

と言いかけると、恭二が突然立ち上がった。

「少し、黙っててくれないか」

激した態度ではなく、普段通りの静かな物言だった。

洋子が部屋を出ていつてからも彼は筆を持つことなく考えていた。頭の中では様々な色が浮かび、消えていく。この上に何を塗ったらいいか全く分からない。洋子は洋子で何もする気が起こらずテールに突っ伏していた。無理に明るくした反動がきたようだ。見るまいとしていた遺影がどうしても目に入ってしまった、そうすると失ったもののことを考えてしまう。彼の没頭の仕方は私に原因があるのだろうか、とさえ思う。ただ側にいてくれるだけでいいのに。悲しみは同じなのだから。

夕方になって恭二が外に出ると言った。

「私も行く」

一人でいると押しつぶされそうだった。洋子は子供のようには恭二にすぎり、家を出る。夕日を浴びた土手は心地よさそうに光を反射していた。遊ぶ子供たちの声が耳に痛い。太陽を睨んだまま、彼は座っている。描く対象としてもっとも好きだと言っていた。洋子がどうして？ と聞くとこんな応えが返ってきたものだ。

「同じものであるのに同じでないとこころが人間のように思えてね」

今同じものを見ていて、洋子は違った感想を得た。

「太陽って、空気みたいなものね」

「どうして？」

今日初めて、恭二が洋子を見た。それを見つめ返して、彼女は言葉を選びながらこう言った。

「いつもは存在を感じないのに、私が必要だと思ったら、望み通りの姿を返してくれるから」

夫に向けたメッセージでもあった。彼女が逸らした眼差しを恭二は追っている。改めて太陽を見つめ直す。オレンジは黙ったまま沈んでいった。下から溶けていくように消える。長い時間をそこで過ごしていると自分が閉じこめられているような気分になった。

恭二は太陽が完全に沈んでしまったのを見て取ると、洋子の肩を抱き寄せた。囁くように言葉を紡ぎ出していく。

「あの子に名前をつけてあげたいと思っていったんだ。結局私は良い

名前をつけてあげられないままだった。せめてそうしないことには、これ以上前に進めないと思ったんだ」

洋子は黙っていた。

「でも私は不器用だから、絵を通してでないと何かを表現することができない。今描いているものができれば、それにタイトルをつけることができれば、それがそのままあの子の名前になると思ったんだ」

返事をする代わりに肩を寄せた。洋子に伝わる恭二の体温が、ひどく熱く感じられる。表現は違っても、悲しみを分かち合ってくれていたのだと思うと、嬉しく思う。しかし、それを今まで話してくれなかったことに不満を抱き、彼の脇腹をつねってみた。少し体を振り、恭二はゴメンと謝った。

「私にも手伝わせてよ」

トーンを上げて言った言葉に彼が振り向いた。でも、と戸惑いを見せる。

「私だって美大でてるんだから」

それでもなお、恭二は躊躇しているようだった。洋子が立ち上がり、手を引こうとする。

「それに……二人の子供なんだから」

声の調子とは異なって泣き出しそうな洋子を見て、恭二はようやく自分の行動が妻を不安にさせていたのだと知った。反対に腕を引いて洋子を抱き寄せると、彼女の涙腺はとうとう決壊してしまった。

部屋にいろのがいけないのよ、そう彼女が言うので二人の思い出の場所を巡り、絵を描き続ける。正確には彼にはまだ何も描けていなかった。ただ真つ青なキャンバスだけが運ばれていた。初めて二人が出会った大学、結婚して住み始めたアパート、恭二が入選した絵を飾っていた美術館、洋子の勤め先、しかしどこにいても恭二には得るものがなく、一ヶ月が過ぎていた。絵の具は乾き、落ちて着

いてみると最初暗かったキャンパスの下塗りはやや明るいようにも思えてきた。

二人でよく行った写生場所に行く。学校の裏にあるそこは、結婚してから二人の……ある意味では日常生活の場だった。

「ここに来ると落ち着くね」

洋子が平たい石に座り空を見上げる。鎮魂とは正反対の爽やかな木漏れ日が射す。携帯用のイーゼルを立てて、恭二はじっと画面を見つめていた。子供の声、鳥の羽ばたき、気持ちよさを感じることなくキャンパスに何かが写るのをじっと待っている。うつすらと現れては消える映像に恭二は戸惑っていた。画面を乗り越えて描かれる思いの深さに辟易していた。そんな彼を見て、洋子が声を荒げる。「ほら、せっかく久しぶりに来たんだからのんびりしなさいよ」そう言つてむりやり隣に座らせる。

「絵のことが頭から離れない？」

「うん」

「たまにはのんびりするのも良いじゃない」

「だけど」

はつきりしない男だ。言葉を濁しながら恭二が言った。

「なんだか……最初の頃と違ってきたような気がする」

「なにが？」

「このところ、二人ですつと出かけて……考えていたものが薄れていくような気がして」

「意欲がなくなっただってこと？」

「そうじゃない。だけど、絵に向かう理由が変わってきたような気がするんだ」

こうして二人座っていると、とても落ち着いていると感じる。この風景を描写するだけで全てが許されるような気持ちになってくる。「子供の名前を考える、それが目的よね。もう、あなたにとってあの子は思い出になっちゃったの？」

言われてみてそうなのかもしれないと思う。思い詰めた気持ちが

無くなっているのは確かだ。夫婦二人の思い出を巡っている内に、子供のことも思い出になっちゃったのだろうか。しかし恭二はそれとも違うと思った。

「家に帰ろう」

突然、彼がそう言った。忙しくイーゼルを畳み、駆けるようにして歩いていく。開いていく差を気にすることもなく恭二は歩き、やがて駆け出す。

「どうしたの」

もう声が届かない場所にいる。疲れてしまい、洋子は歩き出した。急ぐことはない。彼は家にいるのだ。

彼は何かを掴んだのだろうか。先程のやり取りを思い出しても、きっかけを掴めない。ただ、あの場所がそうさせたのだとしても洋子には納得ができた。二人が本当に夫婦らしくいられたのは、あそこだけのような気がしたからだ。

家に戻っても、恭二の姿は見えない。探すまでもなく居場所は分かっていた。

彼の行く場所はアトリエしかない。

静かにドアを開く。制作中だとしたら邪魔したくはない。カラカラと音が鳴っている。絵の具を缶の中で混ぜる音だ。声を殺して中に入ると、恭二は缶に入った絵の具を放り投げていた。

「なにしてるの！」

壁一面が青く塗られている。いや、それは塗ったものではなく流れているのだ。ありったけの絵の具をぶちまけ、恭二は何かを作ろうとしていた。

「ほんの少し、部屋から出て行って」

以前とは違う声音だった。気遣いが分かり、大人しく部屋を出る。恐らくあの行為は続き、部屋一杯に絵の具が散乱するのだろう。

数時間が過ぎて、彼の呼ぶ声が聞こえる。

アトリエのドアを押すと、中は真っ暗だった。

「どうしたの、電気もつけないで」

いつかと同じように、それを恭二が制止する。声だけが奥の方から聞こえていた。

「できたよ。私は間違っていたんだ」

部屋中に絵の具の匂いが充満している。頭がくらくらした。いくつも聞きたいことはあったが、まず彼の言葉が気になった。

「間違っていたって？」

「私は作るうとしていたものを勘違いしていたんだ。息子のための絵を描こうとしていたのではない。息子と暮らす空間を作りたかったんだ」

「それで……部屋に絵の具を？」

じゃあ、部屋を暗くしているのは？ そう聞こうとしたとき、カーテンが揺れるのが分かった。

「そろそろ時間だ」

漏れる光が恭二の影を映していた。一気にカーテンを引く。すると、差し込む光はひどく柔らかいものだとなった。夕暮れが訪れている。そしてそれも終わろうとしていた。照らされた部屋はその赤みに包まれて正確な色を識別できない。ただ、絵の輪郭だけが理解できた。広い画面に誰ともつかない三人の肖像……それは直感的に洋子たち家族のものだと思った。空には満天の星、そして月……奇妙なことにはその夜であろう空間には太陽も一緒に存在していた。家族の真上に大きく歪んだ太陽がある。そしてそれは、窓からの光によってオレンジ色に見えていた。

感想を漏らそうとした洋子の口を閉ざして、恭二がもう少し待つように言う。分刻みに夕暮れの明るさは落ちていき、暗闇が部屋に入り込んできた。

その、ちょうど境界線。

薄明の時に絵が変化を遂げる。

明るかった太陽が暗く、暗かった月が明るく輝いていた。空間と絵は溶け込み、全ての距離は零に等しくなっていく。光に照らされていた頃には分からなかった家族の顔が、今でははっきりと見えて

いた。

「笑ってる」

絵の中の洋子と恭二、その間で子供は笑っていた。どちらからともなく二人は歩み寄り、肩を寄せ合っていた。

「洋子、見てごらん。陽児が笑ってるよ」

そして、二人はアトリエを出る。

幸せそうな家族を残して。

自分たちはまた、新しい家族の姿を探すために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3480s/>

薄明のとき

2011年4月15日09時25分発行